

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】

都道府県名

埼玉県

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	東松山市立松山中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	5	4	6	0	15	27
生徒数	165	155	206	0	526	

研究の概要

1. 研究主題

学力向上のための授業方法の工夫と教材開発
- 生徒一人ひとりへのきめ細かな指導をめざして -

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

1年生：数学 - TT指導
2年生：数学 - 習熟の程度に応じた少人数指導
子どもの理解度に差が出やすい教科であるため。
1年生：英語 - 習熟の程度に応じた少人数指導
2年生：英語 - TT指導
子どもの理解度に差が出やすい教科であるため。
2年生と3年生：社会 - 2時間連続の授業
「問題解決力の育成」という、これまでの研究を継続して実施し、その成果をあげるため。
全教科・全学年における授業方法の工夫と改善

(2) 年次ごとの計画

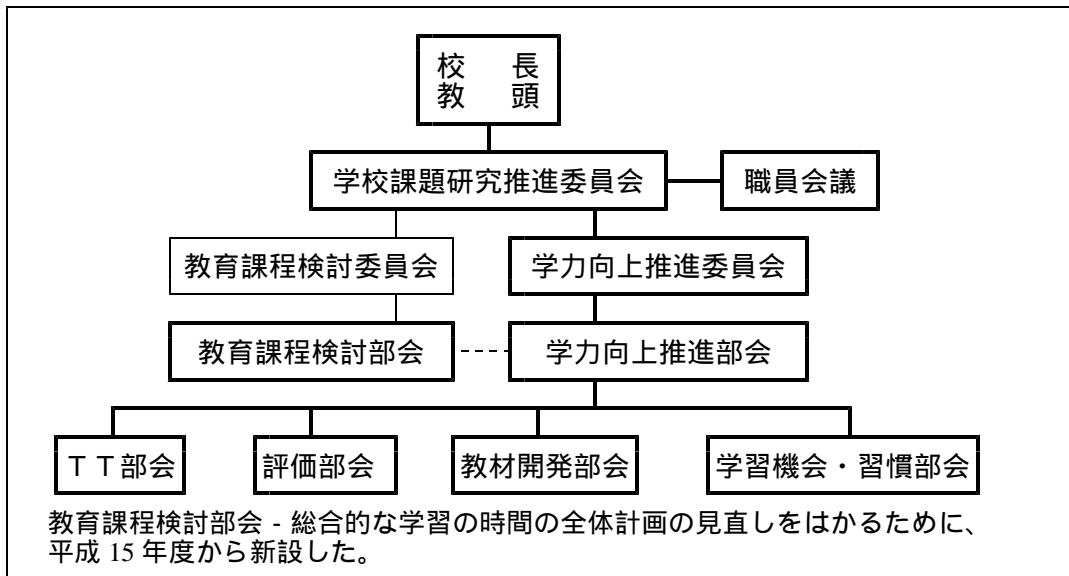
平成14年度	<p>テーマ 生徒の興味・関心を引き出し、学習意欲の喚起につながる効果的な教材の開発・工夫 仮説 生徒の学習意欲の喚起や、学習課題の把握につながる効果的な教材を各教科ごとに開発すれば、本校が求める「生徒自らが発見した学習問題を解決するために、思考力や判断力、表現力などの問題解決力を駆使し、自らの力で解決し獲得した知識を構築したもの」という「学力」を身に付けさせることができる。</p> <p>研究内容・方法 学力についての共通認識と研究の方向性についての共通理解 松山中学校の捉える学力観と各教科の求める学力を明確にした。 授業研究会の実施 全教科で指導者を招き、授業研究会を実施した。教科部会を中心に教科全体の授業の質を向上させるべく、今年度の研究テーマにそって実践研究を進めた。 全校生徒対象の授業に関する意識調査を実施 問題解決力を育てる指導過程の工夫（1・2年の社会科）</p>
--------	--

平成	<p>テーマ ・指導方法の工夫・改善について （習熟の程度に応じた少人数指導、問題解決的な学習を中心に） ・効果的な教材の開発・工夫について ・指導と評価の一体化について</p>
----	---

成 15 年 度	仮説 ・各教師が指導や評価の技術を向上させることにより、わかる授業につながり、確かな学力を身に付けさせることができる。 ・習熟の程度に応じた少人数指導等により、効果的に確かな学力を身に付けさせることができる。 研究内容・方法 習熟の程度に応じた少人数及びT T指導の実施（英語・数学） 問題解決力を育てる指導過程の工夫（社会科） 効果的な授業展開例の蓄積と活用及び授業事例集の作成 C評価の付いた生徒への指導方法の工夫と手立て 生徒一人一人へのきめ細かな対応の工夫 - 「そのつど評価」の実施 朝読書への取り組みの深化と補充学習の充実及び家庭学習の習慣化 全校生徒への意識啓発事業 「学習コーナー」の設置 「楽習のススメ」通信の発行
-------------------	---

平 成 16 年 度	テーマ 学力の定着状況についての確認と授業方法の工夫・改善のまとめ 仮説 2年間の実践を分析し、成果を活用することにより確かな学力を身に付けられると思われる。 研究内容・方法 習熟の程度に応じた少人数及びT T指導の実施（英語・数学） 授業の理解度等に関するアンケート調査 5教科における学力テスト結果3カ年の比較と考察 問題解決力を育てる指導過程の工夫（1・3年の社会科） 研究のまとめ
------------------------	---

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

学習に関するアンケート調査を実施した結果、指導方法の工夫・改善を図る上での参考資料が得られた。別添資料
 公開授業研究会を実施して、近隣の中学校にも実践を紹介した。結果として、全職員の確かな学力の向上を目指しての授業改善への取り組みが活発になった。

2. 今後の課題

年間評価計画に盛り込んだ、「C評価の生徒への手立て」を実践しながら検討し、次年度へ生かしていく必要がある。
個々の教師が作成した学習プランをもとに、形成的評価や総合評価の場面を設定し、指導と評価の一体化を図る。また、教師と生徒の意識のズレを認識し、学習プランの見直しを行いながら、より効果的な計画を作成する必要がある。
「学力」の捉え方は様々であるから、単に筆記テストの平均点が上がったことだけをもとに、全校生徒の学力が向上したことは判断しにくい。その具体的な向上の様子を判断できる観点別評価を生かした問題の作成と分析が必要である。

学力把握のための学校としての取組

埼玉県教科研究会作成の学力テストの継続的な実施
学力調査結果の考察について
○学校(学年)としての、平均点や達成率についての考察
○達成率：8割以上の占有率、5割以上の占有率、5割以下の占有率
「授業についてのアンケート」の実施

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

公開授業研究会の実施 平成15年11月25日(火)と研究紀要の作成
公式ホームページの早期開設による実践状況のPR
校内に「学習コーナー」の設置と「楽習のススメ」通信の配布による意識の啓発

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無

別添資料

「授業についてのアンケート」を評価部会で作成し、全校生徒を対象に1学期末に実施した。昨年度実施した内容を基に質問項目を設定し、また記入方法を記述式から選択式に変えて、今後の変容を追跡調査しやすくした。

- 1 あなたにとって、どのような学習方法がわかりやすいですか。
- 2 どのような時に、意欲的に学習に取り組めますか。
- 3 どのような教材で学習したときに、授業がわかりやすく楽しいですか。
- 4 あなたは現在、家庭で一日どのくらい勉強していますか。(塾での学習は除く)

〈考察〉

資料1によれば、「どのような学習方法がわかりやすいか。」という質問に対し、6割以上の生徒が「教科書に沿って先生が詳しく説明し、まとめてくれる授業」と答えている。

生徒にとって「教科書が学習の拠り所」である、と感じている者が多い点を指導の基本におくべきであろう。しかし、教師の指導面では、教科書の内容を説明するだけの「知識伝達型」の授業形態にならないよう十分注意しなければならない。また学年が上がるに従って増加していることから、生徒が、学力を知識中心にとらえている傾向も伺える。

「生きる力」としての学力が、基本的に観点別評価に示されたような総合的なものであることを踏まえ、教科書だけでは身に付かない学力をどうやって付けていったらいいのか、充分啓発しながら指導していく必要がある。「確かな学力」を育む上でも「課題探求」や「話し合い」を取り入れた授業形態が、生徒にとってもより

分かりやすいものとなるよう、指導法を工夫・改善していく必要がある。

資料2からは、生徒にとって意欲的に取り組める授業とは、「授業の最初に面白そうな話題や興味を引くテーマが示された時」であることがわかる。

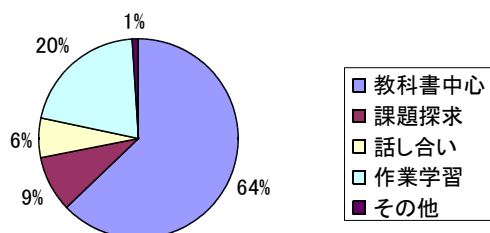
興味関心の喚起が、生徒の学習へのモチベーションを高める上で有効である点を押さえ、導入時の工夫とりわけそうした題材の発掘・開拓が重要である。例えば、2時間続きの社会科授業においては、学習の導入に当たる部分(=課題をつかむ部分)にかなりの力を入れ、いかに導入時の工夫で生徒の関心・意欲を引きつけるかを重視して取り組んでいる。風刺画のような絵、実物資料、写真、音楽、ビデオ、

詩、作文などの題材はもとより、生徒の発言や作成資料、場合によっては生徒自身も教材と考え、学習意欲を喚起させ、関心を高める工夫をしている。

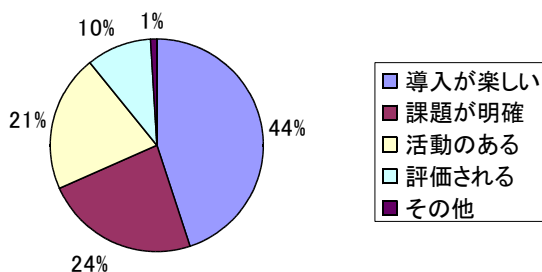
資料3からは、「教科書を中心に、資料集などの副教材で補って行われる授業」が、分かりやすく楽しいと生徒はとらえている。これに沿って考えると、常に教科書との関連を子どもに確認・理解させながら、

プリント学習や作業学習を展開していくことが大切であろう。しかし、ともすると生徒は安易な所に飛びつきたがり、負担の大きい学習を避けたがる傾向もある。知識理解以外の力を付ける方法は、多岐に渡っている。教科書以外にも、自分の考えの裏付けとなる資料を用意するために、インターネットを利用したり、現地調査に出向き、直接資料を収集したり、関係諸機関へ問い合わせることも大切な課題解決の方法である。こうした力を計画的に付けさせていくことは大事な指導の一側面である。生徒が、自らの手で授業を楽しくする

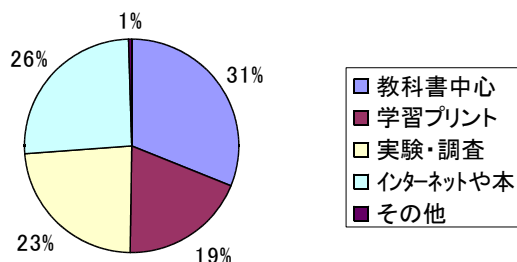
資料1 わかりやすい学習方法 全体



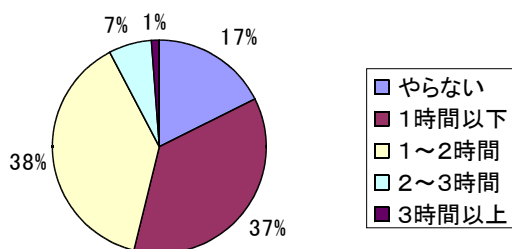
資料2 意欲的な学習 全体



資料3 わかりやすい授業 全体



資料4 家庭学習時間 全体



ことにもつながる点を押さえ、粘り強く指導していく必要がある。

資料4の家庭学習時間であるが、塾での学習を除き、1時間以下から「やらない」という生徒が最も多く、全体の半分以上を占めている。別の調査で本校の平均55%の生徒が塾に行っている状況もあるが、家庭学習の習慣化がまだ充分ではなく、特に自主的な学習が不足している状況が読みとれる。

現在本校では、生徒から「生活記録ノート」を提出させ、担任が点検し、コメントを記入することで家庭学習の実施状況を把握し激励している。

また、家庭学習ができていない生徒に、習慣化と

定着化がはかれるよう、担任が面談等を利用して積極的に働きかけている。今後も家庭と連携しながら、粘り強く取り組んでいきたい。